《資料紹介》

備後北部の「ヘラ描」須恵器について

－三次市松ヶ迫遺跡群出土資料を中心として－

和 田 麻 衣 子

１　はじめに　　３　関連資料事例
２　松ヶ迫遺跡群の資料報告　　４　おわりに

【要約】
三次市に所在する松ヶ迫遺跡群のヘラ描を有する須恵器資料の再報告を行うと共に、県北の他遺跡の出土事例との関連性を考える。

１　はじめに

令和５年秋、広島県立歴史民俗資料館が所蔵する松ヶ迫遺跡群（三次市東酒屋町所在）のヘラ描を有する須恵器の調査を行う機会を得た。

遺跡群の概要について述べる。立地と環境について、遺跡群が所在する三次地域は、広島県北部中央に位置し、中国脊梁山地の南麓盆地列の一つである三次盆地を中心に構成されている。江の川の主要な支流である可愛川、馬洗川、西城川、神野瀬川は、小支流とともにそれぞれ大小いくつかの低平地を形成し、三次市街地西端付近で合流して江の川となって中国山地を横断し、日本海にそそいでいる。地形は市北側では標高 400 m前後の断層崖が連なるが、南側では低丘陵が展開する。この遺跡群は三次市街地から約３km 南南西から北東に延びる標高 170 ～ 230m の緩やかな丘陵上に立地し、東端は馬洗川に接する。そして、丘陵の南側下方には狭小な谷が馬洗川の支流芋面川に向って延び、谷湧水と溜池を利用して谷水田が古くより営まれてきた。この遺跡群の周辺一帯は弥生時代後期から古墳時代にかけての多くの遺跡が知られている。

昭和 52 年（1977）に三次工業団地の造成に伴う発掘調査が行われ、縄文時代早期の住居跡をはじめ古墳時代後期（６世紀後半）を中心とする須恵器窯跡群と集落跡が検出された。松ヶ迫Ｄ地点遺跡では２基の窯跡が確認され、そのうちＭＹＫ１号窯跡は２基の窯が重複している。一次窯は地下式構造、二次窯は一次窯の天井が崩落後、再築された半地下式構造である。資料は灰原・燃焼部から出土したものである。詳細は出典を参照されたい。本稿では松ヶ迫Ｄ地点遺跡ＭＹＫ１号窯跡から出土した須恵器のうち「ヘラ記号」のある資料（総数 22 点）を対象に拓本採取及び表面観察をおこなった成果を報告する。

ヘラ記号について中村浩氏が陶邑の資料を集成するなかで、「須恵器の一部器種にみられる「○」、「×」、「＋」、「－」、「||」などの簡単な記号を表現した刻文で、土器成形後、焼成前に箆様のもので陰線刻されたものである。」と定義する（中村 1977）。本稿ではそれに準じて資料の

観察及び考察をおこない、あわせて松ヶ迫遺跡群が所在する三次盆地の他事例を紹介する。

なお、本稿では資料の器種の法量等の基本情報と拓本のみ掲載する。出土遺構及び遺物の詳細については原典（広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1981）を参照願いたい。資料の時期については中村編年（中村 1999）に準拠する。以下、文中の法量に関してはcm単位とし、単位表記を省略する。また図版の縮尺はすべて３分の２である。

２　松ヶ迫遺跡群の資料報告（第１～３図）

対象とした須恵器の時期は資料の大部分が小破片であるため復元不可能で器種が不明であるが、判明しているものは、古墳時代後期である。本稿では記号の種類に分類して述べる。なお、資料型式の新旧に準じて掲載していないことを御了承いただきたい。以下、文中の表記について述べる。資料番号の次に記した［　］内について、報告番号が判明する場合には記載する。それ以外は出土遺構と日付を示す注記を表記する。「ＭＹＫ１」は「松ヶ迫Ｄ地点遺跡ＭＹＫ１号窯跡」、「灰褐」・「黒褐」は土層を示す。そして、全て「松ヶ迫Ｄ地点遺跡」出土なので、以下、遺跡名を省略する。

なお、２項文中にて後述する［資料番号１～17・22］はＭＹＫ１号窯跡灰原、［資料番号18～21］は同窯跡燃焼部からの出土である。

また、各資料の報告にあたり、同項文中では［資料番号●］と記すが、これは第１図～第３図に記した各図中の個別番号と対応するので、あわせて補足させていただく。

【資料番号１】［ＭＹＫ１－３Ｄ　灰褐　771125］

器種は杯身の蓋で、口縁部から天井部にかけての３分の１の破片である。法量は器高約 2.8、半径は約 9.2、器壁は約 0.5。口縁端部は丸くおさまり天井部への境目は鈍角でやや外傾し、肩部の端部は外側に向けてやや引き出し緩やかなドーム状を呈する。色調は内外面ともに明灰色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。焼成は良好である。時期は６世紀末から７世紀前半である。

ヘラ描は外面天井部､外側から中心にむけて､篦状工具で暗文状に薄く描く「|」の形状である。線の長さ 3.3 で太さは 0.1 である。

【資料番号２】［Ｊ３　ＭＹＫ１　灰　771122］

器種は不明で、法量は最大幅 7.2 から 8.2 の破片である。外面のみ残存して内面は剥離しており、器壁は 0.5 である。全体的に緩やかに内湾する。色調は内外面ともに明灰色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。焼成は良好である。

ヘラ描は外面に「||」を記し、外側から中心を経て反対側に向けて、篦状工具で強い平行線を刻む。各直線の長さ 2.6・太さ 0.2、長さ 3.7・太さ 0.2、直線の間隔は 1.2 である。

【資料番号３】［ＭＹＫ１－３Ｄ　771203］

器種は不明で、法量について最大幅は各約 8.4、外面のみ残存して内面は剥離しており、器壁は約 0.5 である。外面は全体的に緩やかに内湾する。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面に「||」を記す。外側から中心に、篦状工具で強い直線を刻む。各直線の長さが 2.3・2.5 でどちらも太さ 0.1 から 0.2、直線の間隔は１から 1.3 である。起点から中心に向けて

２本の直線の間隔を広げ若干「ハ」字状にみえるが破片の為全容は不明である。

【資料番号４】［報告番号 11（Fig54）］［ＭＹＫ１－27　771203］］

器種は不明で、法量は最大幅 6.3 から 7.2 の破片である。内外面共に残存している。器壁は約 0.5 である。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。全体的に緩やかに内湾する。

ヘラ描は外面に「||」を記す。外側から中心を経て反対側に向けて、箆状工具で強い平行線を刻む。起点は残存しているが終点は欠損している。各直線の長さが 7.4・7.6 でどちらも太さ 0.1 から 0.2、直線の間隔は 2.0 である。

【資料番号５】［ＭＹＫ１－28　灰黒　771125］

器種は不明で、法量は最大幅約 8.4、内外面共に残存している。器壁は約 0.5 ～ 0.8 の破片である。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。全体的に緩やかに内湾する。

ヘラ描は外面に「||」を記す。この記号の部分は完全に残存し、外側から中心を経て反対側に向けて、工具で強い平行線を刻む。各直線の長さが 6.0・6.5 でどちらも太さ 0.1 から 0.2、直線の間隔は 1.0 である。破片の為全容は不明である。

【資料番号６】［ＭＹＫ１　771220］

器種は不明で、法量について最大幅は 4.0 から 7.2、器壁は 0.4 の破片である。全体的に緩やかに内湾する。色調について外面は暗灰色から暗黄褐色、内面は暗灰色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面に「||」を記す。２本のうち１本は完全に残存、もう１片は端部が欠損している。外側から中心を経て反対に向けて、箆状工具で強い平行線を刻む。各直線の長さが 6.0・6.2 でどちらも太さ 0.1 から 0.2、直線の間隔は 1.4 から 1.8 である。

【資料番号７】［ＭＹＫ１－22　灰黒　771125］

器種は不明で、最大幅 6.2 から 7.2、器壁は約 0.8 の破片である。全体的に緩やかに内湾する。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面に「||」を記す。２本のうち１本は完全に残存、もう一片は端部が欠損している。外側から中心を経て反対側に向けて、箆状工具で強い平行線を刻む。各直線の長さが 5.5・5.9 でどちらも太さ 0.1 から 0.2、直線の間隔は 1.0 から 1.8 である。起点から中心に向けて２本の直線の間隔が広がり若干「ハ」字状にみえるが、破片の為全容は不明である。

【資料番号８】［ＭＹＫ１－37　灰黒　771125］

器種は杯身で、口縁部から底部の破片である。残存率は３分の２で、法量は、口径は約 9.6、器高は約 4.8、器壁は約 0.5。口縁端部は丸くおさまり、ほぼ 45 度でたちあがる。受部端部はほぼ水平に外側に引き出す。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀末から７世紀前半である。

ヘラ描は天井部外面に中心から外側方向に箆状工具で暗文状に薄く記した「||」の形状である。各直線の長さが 1.6・太さ 0.1。他の資料と同様に回転ヘラ削り後に意図的に記したものである。

【資料番号９】［Ｊ－３　ＭＹ　褐灰　771122］

器種は杯身で、底部から胴部の破片である。法量は最大幅 6.3 から 9.8、器壁は 0.8 の破片である。全体的に緩やかに内湾する。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面に「|||」を記す。外側から中心に、箆状工具で強い直線を刻む。各直線の長さ

が 2.8・4.2・6.1 でどちらも太さ 0.1 から 0.2、直線の間隔は 0.7 から 1.7 である。３本のうち２本は起点から中心に向けて平行に、残り１本は中心の線に対して起点から中心にむけて若干「ハ」字状にみえる。破片の為全容は不明である。

【資料番号 10】［ＭＹＫ１－23　灰褐　771125］

器種は杯蓋で、口縁部から天井部にかけての約３分の１の破片である。法量は、復元口径は約 6.6、器高は約 2.1、器壁は 0.8。口縁部から肩部への立ち上がり幅は 0.2 である。内外面共に残存している。口縁端部は丸くおさまり、外面は肩部にかけて鈍角ぎみに立ち上がる。内面は浅い沈線を有する。肩部から天井部にかけてはやや直線的である。色調は内外面ともに灰白色から黄灰色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀後半から７世紀前半である。

ヘラ描は外面の天井部に「|||」を記す。外側から中心に、箆状工具で暗文状に薄く直線を描く。残存部について、各直線の長さが 2.2・5.3・5.2 でどれも太さ 0.1 から 0.15、直線の間隔は 1.3 である。３本とも起点から中心に向けて平行である。破片の為全容は不明である。

【資料番号 11】［報告番号 12（Fig54）・ＭＹＫ１号窯跡灰原出土］［ＭＹＫ１－23　灰褐　771125］

器種は不明で、法量は最大幅各 8.4、器壁は 0.6 の破片である。外面のみ残存、内面は欠損剥離している。外面は全体的に緩やかに内湾する。色調は内外面ともに灰白色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面に「|||」を記す。外側から中心を経て対極に向けて、箆状工具で強い平行線を刻む。「|||」の各起点は残存しているが終点は欠損している。各直線の長さ 5.3・5.4・7.0 でいずれも太さ 0.1 から 0.2、直線の間隔は 1.4 から 2.2 である。３本のうち２本は起点から中心に向けて平行に、残り１本は中心の線に対して起点から中心にむけて若干「ハ」字状に開く。破片の為全容は不明である。

【資料番号 12】［ＭＹＫ１号窯跡灰原出土］［Ｉ・３　ＭＹＫ１　灰　771122］

器種は杯蓋で、肩部から天井部にかけての約３分の１の破片である。法量は最大幅 6.2 から 7.2、器壁は 0.6。天井部にかけての境目は鈍角で肩部から天井部にかけて緩やかな角度で直線状を呈する。色調は内外面ともに灰白色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面天井部中心に外側から中心に向けて直角に交差するように描かれた２本の直線がみえるが中心部は欠損している。中心で交差している可能性が考えられる。箆状工具で暗文状に薄く直線を描く。各直線の長さが 2.3 及び 3.0 で太さは 0.1 である。本稿では拓本を示していないが、天井部内面にヘラ描で「||」が記され、長さ 2.8・1.8 で太さは 0.1 である。内外面共にヘラ描を有し、松ヶ迫遺跡群で唯一の事例である。破片の為全容は不明である。

【資料番号 13】［ＭＹＫ１号窯跡灰原出土］［ＭＹＫ１－30　灰黒　771125］

器種は杯蓋で、口縁部から天井部にかけての約３分の１から 10 分の１の破片である。法量は最大幅 5.7 × 6.7、器壁は約 0.6。口縁端部は丸くおさまり、肩部にかけて緩やかに立ち上がり、肩部から天井部にかけて直線状を呈する。色調は内外面ともに灰白色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀後半から７世紀前半である。

ヘラ描は外面天井部中心に外側から中心に向けて直角に交差するように描かれた２本の直線がみえるが中心部は欠損している。他の事例より「×」である可能性はあるが破片なので全容は不

明である。篦状工具で暗文状に薄く直線を描く。長さ 2.0・2.6 で太さ 0.1 である。

【資料番号 14】［ 報告番号 10（Fig54）］［ＭＹＫ１－37　灰黒　771125］

器種は杯蓋で、口縁部から天井部にかけての約６分の１の破片である。法量は器高は約 2.5、器壁は約 0.6。口縁端部は丸くおさまり、天井部への境目は鈍角で肩部から天井部にかけて緩やかな角度で直線状を呈する。色調は内外面ともに褐灰色で胎土の砂粒は細かい。やや焼成不良である。時期は６世紀後半から７世紀前半である。

ヘラ描は天井部外面に「×」を記す。外側から中心に向けて２本の直線が交差する。２本の線はどちらも欠損している。長い線は長さ 6.8・太さ 0.1、篦状工具で外側から中心に暗文状に薄く直線を描く。短い線は長さ 2.6・太さ 0.1 で外側から中心に、篦状工具で強い直線を刻む。線刻の順番は、切り合い関係から短い線が後である。破片の為全容は不明である。

【資料番号 15】［ Ｉ・３　ＭＹＫ１　灰　771124］

器種は杯蓋で、口縁部から天井部にかけての約３分の１の破片である。法量は最大幅 6.4 から 8.0、器壁は 0.6。天井部への境目は鈍角で肩部から天井部にかけて緩やかな角度で直線状を呈する。色調は内外面ともに暗灰で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は天井部外面のほぼ中心に「×」を記す。２本の線はどちらも欠損している。長い線が長さ 4.6・太さ 0.1 で篦状工具で外側から中心に暗文状に薄く直線を描く。短い線は長さ 3.2・太さ 0.2 で外側から中心に、篦状工具で強い直線を刻む。線刻の順番は、切り合い関係から長い線が後である。破片の為全容は不明である。

【資料番号 16】［ＭＹＫ１－23　灰褐　771125］

器種は杯身で、底部から口縁部にかけての約４分の１の破片である。法量は最大幅 4.2 から 5.0、器壁は 0.6。底部から口縁部へは緩やかに立ち上がる。色調は内外面ともに灰白色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は底部外面のほぼ中心に「×」を記す。２本の線はどちらも欠損している。長さ 3.5・太さ 0.2 で篦状工具で外側から中心に暗文状に薄く直線を描く。もう一方は長さ 2.5 で太さ 0.2 で外側から中心に篦状工具で強い直線を刻む。線刻の順番は切り合い関係から長い線が後である。破片の為全容は不明である。

【資料番号 17】［ＭＹＫ１号窯跡灰原出土］［ＭＹＫ１　黒褐　771125］

器種は杯蓋で、口縁部から天井部にかけての約３分の１の破片である。法量は口縁部直径 15.6、器高は 4.7。口縁端部は丸くおさまり肩部にかけて緩やかに立ち上がり、肩部から天井部にかけてドーム状を呈する。色調は内外面ともに褐色でやや軟質で胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀後半から７世紀前半である。

ヘラ描は天井部外面に「×」を記す。２本の線は篦状工具で暗文状に薄く直線を描く。長い線が長さ 4.5・太さ 0.1 で篦状工具により外側から中心に向け暗文状に薄く直線を描く。短い線は長さ 4.2・太さ 0.1 で外側から中心に向け、長い線同様篦状工具で強い直線を刻む。破片の為全容は不明である。

【資料番号 18】［ＭＹＫ１　燃焼部　771220］

器種は杯蓋で、天井部から口縁部にかけて約３分の１の破片である。口縁端部は欠損している。法量は最大幅 4.2 から 5.0、器壁は約 0.5。天井部へは鈍角で肩部から天井部にかけて緩やかな

角度で直線状に立ち上がる。色調は内外面ともに暗灰色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面天井部中心に、外側から中心に向けて直角に交差するように描かれた２本の直線がみえるが中心部は欠損している。長さ 2.0・太さ 0.2 で外側から中心に、篦状工具で強い直線を刻む。破片の為全容は不明であるが「×」である可能性が考えられる。

【資料番号 19】［ＭＹＫ１　灰　771208］

器種は杯蓋で、天井部から口縁部にかけての約３分の１の破片である。法量は最大幅 7.3 から 8.0、器壁は約 0.6。復元口径 15.6。口縁端部は丸くおさまり内面には浅い沈線が１条めぐる。肩部にかけてやや直立ぎみに立ち上がり、肩部から天井部にかけてドーム状を呈する。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、焼成良好で胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀後半である。

ヘラ描は「|」である。天井部外面に外側から中心に向けて篦状工具で強く描く。長さ 5.7・太さ 0.9。破片の為全体は不明である。

【資料番号 20】［ＭＹＫ１－22　灰黒　771125］

器種は杯蓋で、天井部から口縁部にかけての約３分の１の破片である。口縁端部は欠損している。法量は幅 5.9 から 7.1・器壁 0.6。肩部から天井部へドーム状に立ち上がる。色調は内外面ともに暗灰色で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面天井部中心に「||」を記し外側から中心に向けて描いている。長さ 1.4 及び 3.3 で、太さはいずれも 0.1。破片の為全体は不明である。

【資料番号 21】［ＭＹＫ１　灰］

器種は杯蓋で、天井部から口縁部にかけての約３分の１の破片である。口縁端部は欠損している。法量は最大幅 5.4 から 6.2、器壁は 0.5。肩部から天井部へ緩やかに立ち上がる。色調は内外面ともに暗灰で堅緻、胎土の砂粒は細かい。

ヘラ描は外面天井部中心に、「|||」を外側から中心に描いている。長さ 5.3･3.1･1.7、太さ 0.1。破片の為全体は不明である。

【資料番号 22】［ＭＹＫ１－23　灰褐　771125］

器種は杯蓋で、天井部から口縁部にかけての約３分の１の破片である。口縁端部は丸くおさまり口縁端部の一部内面は欠損している。内面には浅い沈線が１条めぐる。法量は最大幅 7.9・器壁 0.4。肩部から天井部へ緩やかに立ち上がる。色調は内外面ともに暗灰で堅緻、胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀後半から７世紀前半である。

ヘラ描は外面天井部中心に「|||」を記す。外側から中心に向けて描く。長さ 2.3・太さ 0.1。破片の為全体は不明である。

以上 22 点の松ヶ迫遺跡群の資料をまとめると、破片が大部分を占めるなかではあるが、ヘラ描の種類は「|」「||」「|||」「×」が存在する。そのうち「||」が全体の総数に対して占める割合が大きい。器種について判別ができるものは杯蓋、施文部位は外面が大部分を占め、施文方法として、調整後に記号を描くようである。刻線方法については①先端が尖った様な篦状工具で暗文状に薄く直線を描く②先端が鈍角を呈す様な篦状工具で強い直線を刻むという２種類がみられ、割合として②の方法が多い。

３　関連資料事例（第４～６図）

次に広義の三次盆地における事例を紹介する。ヘラ描きがされている資料は当該地域で、松ヶ迫遺跡群以外には、４例（上四拾貫第７号古墳・和知白鳥遺跡・境ヶ谷遺跡・大歳遺跡）である。ここで補足として、製作時の痕跡を残す１事例（和知白鳥遺跡）と、筆者が新たに確認した櫛歯状工具による波状文の１事例（上四拾貫第６号古墳）をここで紹介する。なお､先述の２項同様、文中の［資料番号］a ～ e については、第４図～第６図に記した各図中の個別のアルファベットと対応する。

【資料番号 a】（第４図）

上四拾貫第７号古墳（三次市四拾貫町所在・周溝内出土）（出典：広島県教育委員会 1978・報告番号第 14 － 27 図）について、筆者が実見してヘラ描をみとめたものである。器種は杯身で残存率２分の１である。法量は口径 9.8・器高 4.8、口縁部から受部の高さは 1.7 で器壁は 0.3。口縁端部は外反する。口縁部から受部にかけてやや内反し受部端部は外側に水平に張り出す。底部は椀形をなす。内外面は回転ヘラケズリを施す。色調は内外面ともに灰色で堅緻、焼成良好で胎土の砂粒は細かく黒い砂粒を含む。全体的に口縁部径と器高の比率がほぼ２対１で時期は６世紀代である。

ヘラ描は底部外面の中央に外側から中心に向けて直角に交差するように描かれた２本の直線がみえるが、中心部は欠損しているので、２本の直線が交差しているかは不明である。箆状工具で暗文状に薄く直線を描く。長さ 1.1・1.5 で太さは 0.1 である。他の事例より「×」である可能性はあるが破片なので全容は不明である。

【資料番号 b】（第４図）

和知白鳥遺跡（三次市和知町所在・ＳＢ 18 床面出土）（出典：財団法人広島県教育事業団 2012･報告番号 109）の事例では､器種について低脚の高杯とされている。残存率は３分の２である。杯部外面に櫛歯状工具で波状文を施した後、把手を貼り付けているが接合部を残し大部分欠損している。杯部口縁部は器高に対して大きい。色調は内外面ともに灰褐色で堅緻、焼成良好で胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀前半である。箆状工具によるヘラ描は杯部外面に５本の平行線に２本の「ハ」字状の直線を組み合わせたものを記す。線幅は狭いが深く描く。

また、製作時の目印を残す事例として、脚部に透かしを施すため杯部外面と脚部内面の接合面に短い線刻の目印を記す。ナデ消しは行わない。線刻は長さ 0.7 で２本１組・全３か所である。

同様に製作時の痕跡を残す事例が掛原下第７号古墳（三次市南畑敷町所在・北西側墳丘出土）（出典：三次市教育委員会 2002・報告番号６）の高杯にある。時期は６世紀後半で、脚部に透かしを施すため、杯部外面と脚部内面の接合部分に短い線刻を記す。ナデ消しを行わない。線刻は長さ約 0.7、太さ 0.1 で２本１組が全３か所である。紙面の都合上、図面の紹介は省略する（出典参照）。

【資料番号 c】（第５図）

境ヶ谷遺跡（庄原市川西町所在・ＳＢ３出土）（出典：広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1983・報告書番号第 10 図 0316）について筆者が実見してヘラ描きをみと

めたものである。器種は杯蓋で完存している。法量は口径 14.2・器高 5.1・口縁部高は 2.5。器壁は 0.5。口縁部から肩部にはやや内傾し肩部との境界には強いナデを施す。肩部がやや張り出し天井部にむけてドーム状をなす。天井部が口縁部径に対して高い。色調は内外面ともに灰白色から灰黄褐色で堅緻、焼成良好で胎土の砂粒は細かい。時期は６世紀後半から７世紀初頭である。

ヘラ描は天井部外面、中央からやや外れた個所に「|」が記されている。外側から中心を経て反対側に向けて描き全体の３分の２の位置で一度止めて、再び反対側に直線工具で強い直線を刻む。工具を一度止めた位置でやや深く沈めた米粒状の陰刻の跡が残っていて、太さは 0.2 から 0.4。調整について、ヘラ描後に時計方向のナデを施したため、薄いケズリカスの粘土の塊がヘラ描の端部分を覆っている。長さ 9.7・太さ 0.1 から 0.3 である。

【資料番号ｄ】（第６図）

大歳遺跡（三次市下志和地町所在・ＳＢ６出土）（出典：財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1994・報告番号 72）の事例では、器種は長頸壺等の蓋である。出典の報告書内によると「平坦な天井部から内湾して外下方にのび、口縁部となる。受部は凹面をなし、かえりは付け根部分を残し欠損する。天井部中央付近には直線状のヘラ記号の断片が残る。つまみは不明で、ヘラ記号を消してしまう可能性が大きいことから、無かった蓋然性が高い。」（出典より抜粋）とある。残存率は８分の１の破片で、復元図の法量は器高 1.6。色調は淡灰褐色で胎土は緻密、焼成は良好で、時期は７世紀代である。

ヘラ描は蓋の天井部外面に回転ヘラケズリとナデで調整した後に工具で強く「|」が記されている。長さ 1.5・太さは 0.2 である。

【資料番号 e】（第６図）

上四拾貫第６号古墳（墳丘出土）（出典：広島県教育委員会 1978・報告番号第 14 図－ 22 図５）について、筆者が実見してみとめたものである。高杯の脚部外面に部分的な、櫛描状工具を上下させたような文様を施す。最大幅 2.7 から 0.8 である。杯部外面の櫛歯状工具による幅 0.9 の波状文と比較すると、杯部の文様は全周にめぐらされているが脚部の櫛歯状の模様は部分的である。時期は６世紀である。

以上、ヘラ描がみられる資料について、各資料の時期に差異があるが、松ヶ迫Ｄ地点遺跡ＭＹＫ１号窯跡に比べると出土数は僅少である。記号の共通項として「|」もしくは「×」の２種類がみられ、その大部分は外面に施文される。

また、和知白鳥遺跡の箆状工具によるヘラ描ともみられる事例は、県内でも現時点で唯一の事例である。

４　おわりに

最後にヘラ記号についての先学の論考を紹介してまとめと今後の展望とする。

渡辺一氏は、著書の中で研究史を振り返り、「陶邑窯跡群におけるヘラ記号研究は、日本の古代窯業史研究をリードしてきた同窯における研究成果の一部である。」とし、中村浩氏の説をとりあげ「（中略）議論は、記号差＝技法差→工人差→窯の共同利用→工人識別記号を論拠にした中村浩による生産組織論へと展開していく」（中村 1997）とする。続いて九州地方の研究事例を

紹介するなかで、岡田裕之氏の論を紹介している。以下、引用すると「生産側と消費側で個別に検討されてきた、これまでのヘラ記号研究を総合的に捉えた点にあるが、その論は論者の置かれた地域性（北九州地方）と深くかかわっている」とする。

岡田氏は、さらに、消費側としての古墳出土のヘラ記号須恵器に対する研究成果を踏まえて、「古墳出土率が集落に対して格段に高い点を新見解まで高めた」論考を発表し、「生産地において、ヘラ記号における製品の区別がおこなわれるのは、一義的には窯内での生産単位の識別のためであったが、その必要性は生産単位と供給先である古墳・横穴墓との関係から生じたと考えられる。換言すれば、葬送儀礼をおこなう集団単位（消費単位）が要求する一定の器種および一定量の製品が、生産地における生産単位に対応すると考えられる」（岡田 2010）とした。

今回対象とした資料の出土遺跡の種別について、集落は３遺跡、古墳の事例は上四拾貫第７号古墳があるが、事例としては僅少である。それをもとにして判断するのは時期尚早ではあり、地域も異なるが、他地域の事例を詳細に引用することで敢えて比較を試みたい。

前述の岡田氏は、北九州地方を取り上げて「古墳出土率が集落に対して格段に高い点を新見解まで高めた」（岡田 2010）という見解を示す。また、渡辺氏は「牛頸窯跡群における窯跡出土須恵器と窯跡群一帯の古墳出土須恵器とのヘラ記号の関係を総合的に判断すると、岡田論文が掲げた事例を含めて、古墳例には特異なヘラ記号が多い点が目につく。しかもこのような特異なヘラ記号は窯跡側では一般的でなく数量も限定的であり、当初から古墳向けであったことがわかる。窯の共用頻度とは別に理解する必要があること、言い換えればヘラ記号のもう一つの在り方を物語っていることになる。」（渡辺 2022）

ヘラ記号の事例を備後北部と九州地方で比較すると、渡辺氏が紹介しているヘラ記号「|」「||」は、窯跡そして古墳・集落でも存在する。現時点では比較資料がわずかではあるが、当地域のヘラ記号は、他地域でもみられる一般的なものであることが指摘できる。

現在、当該地域における古墳時代の須恵器窯については未解明な点も多いため、検討は慎重におこなうべきであるが、各遺跡の出土資料と須恵器窯の関係について踏み込んだ研究についてはより一層進める必要がある。今後の筆者の課題として、県内他地域の資料の検討や中国地方周辺との状況の比較等一層の研究の深化が求められる。（2024 年２月 29 日脱稿）

なお、本稿で紹介した備後北部における須恵器生産の窯跡については、現在は不明な点が多い。ただし，広島県遺跡地図によると新池北遺跡（庄原市本郷町）に古代の瓦窯（須恵器窯）の存在が記載され、近世製鉄遺跡と重複しているものの、平瓦、丸瓦、須恵器、鉄滓などが確認されている（稲垣寿彦氏のご教示による）。今後の資料の増加を待ちたい。

【謝辞】

本稿をなすうえで各資料の所蔵先である広島県立歴史民俗資料館・公益財団法人広島県教育事業団及び三次市教育委員会には、資料調査において御協力をいただきました。また関連資料の提示や資料調査にあたり多くの方々に助言を賜りました。末尾ながら感謝いたします。

伊藤実　稲垣寿彦　加藤光臣　唐口勉三　川上華恋　葉杖哲也　平川孝志　村田晋　山崎明日香（五十音順、敬称略）

参考文献

石山　勲 1977「古墳における古式須恵器のあり方について」『粕屋郡須恵町所在遺跡群の調査』九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 10　福岡県教育委員会

広島県教育委員会他 1977『三次工業団地造成予定地内松ヶ迫矢谷遺跡発掘調査略報』

岡田裕之 2010「古墳時代における須恵器の生産単位について－須恵器に記されたヘラ記号の目的と関連して－」『史淵』140　九州大学大学院人文科学研究院

中村　浩 1977「須恵器生産に関する一試考」『考古学雑誌』第 63 巻第１号

中村　浩 1999『古墳時代須恵器の生産と流通』雄山閣

広島県教育委員会 1978『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（１）』

広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1981『松ケ迫遺跡群発掘調査報告－三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』

広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1983『境ヶ谷遺跡群－庄原養鶏団地造成に伴う埋蔵文化財の調査－』

広島県教育委員会 1994『広島県遺跡地図』

財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1994『大歳遺跡』

三次市教育委員会 2002『掛原下第７号古墳』三次市文化財調査報告書４

財団法人広島県教育事業団 2012『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う発掘調査報告（19）　和知白鳥遺跡２（古墳時代の調査）』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第 42 集

渡辺　一 2022『須恵器研究の新視角』八木書店

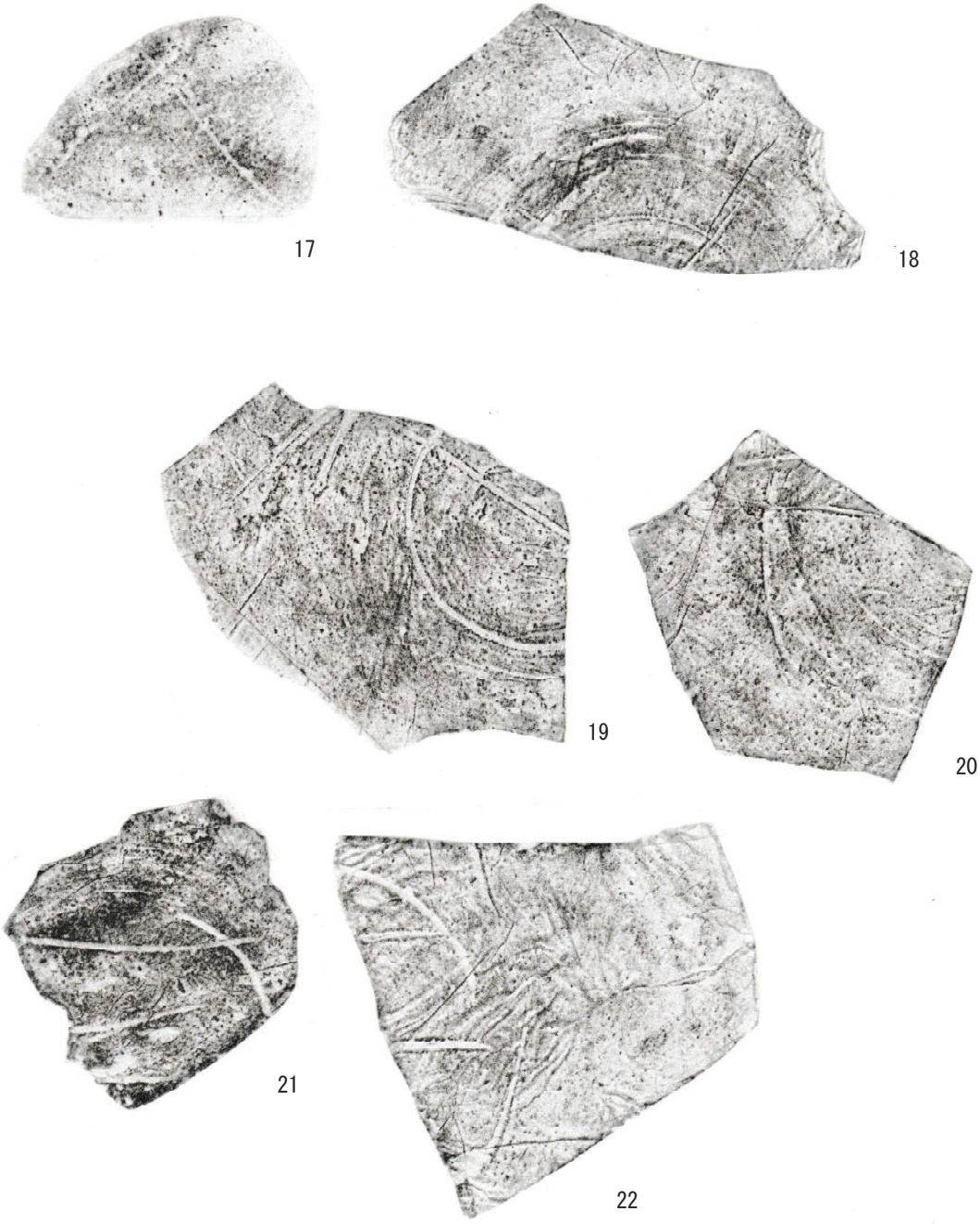
山崎純男 1979「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式須恵器」『古文化談叢』６　九州古文化研究会

和田麻衣子 2021「広島県」『中期古墳研究の現状と課題５～古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって～』第 24 回研究集会資料集　中国四国前方後円墳研究会

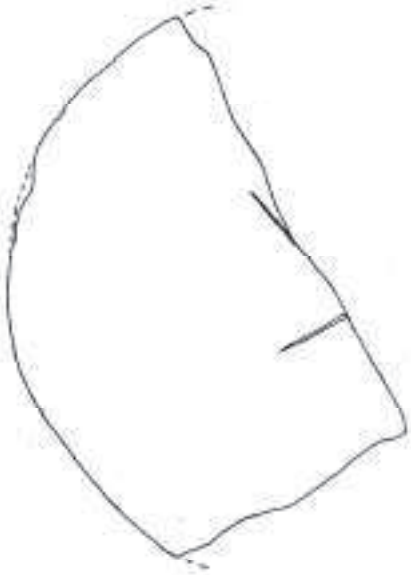
（わだ　まいこ　広島県教育委員会文化財課）

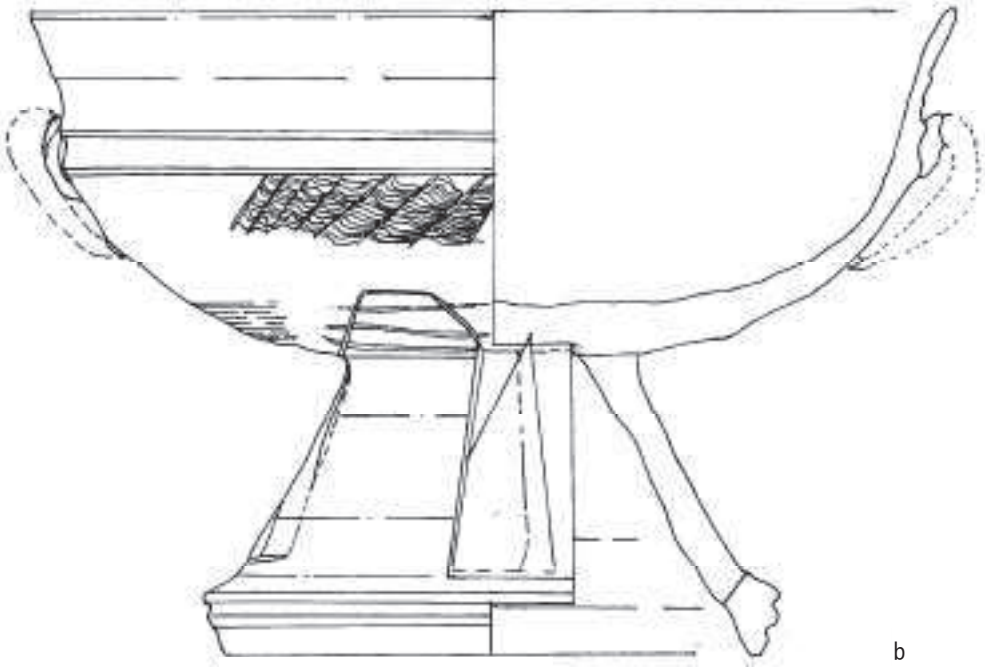
第１図　松ヶ迫遺跡群出土資料①（拓本１～８、縮尺２：３）

第２図　松ヶ迫遺跡群出土資料②（拓本９～16、縮尺２：３）

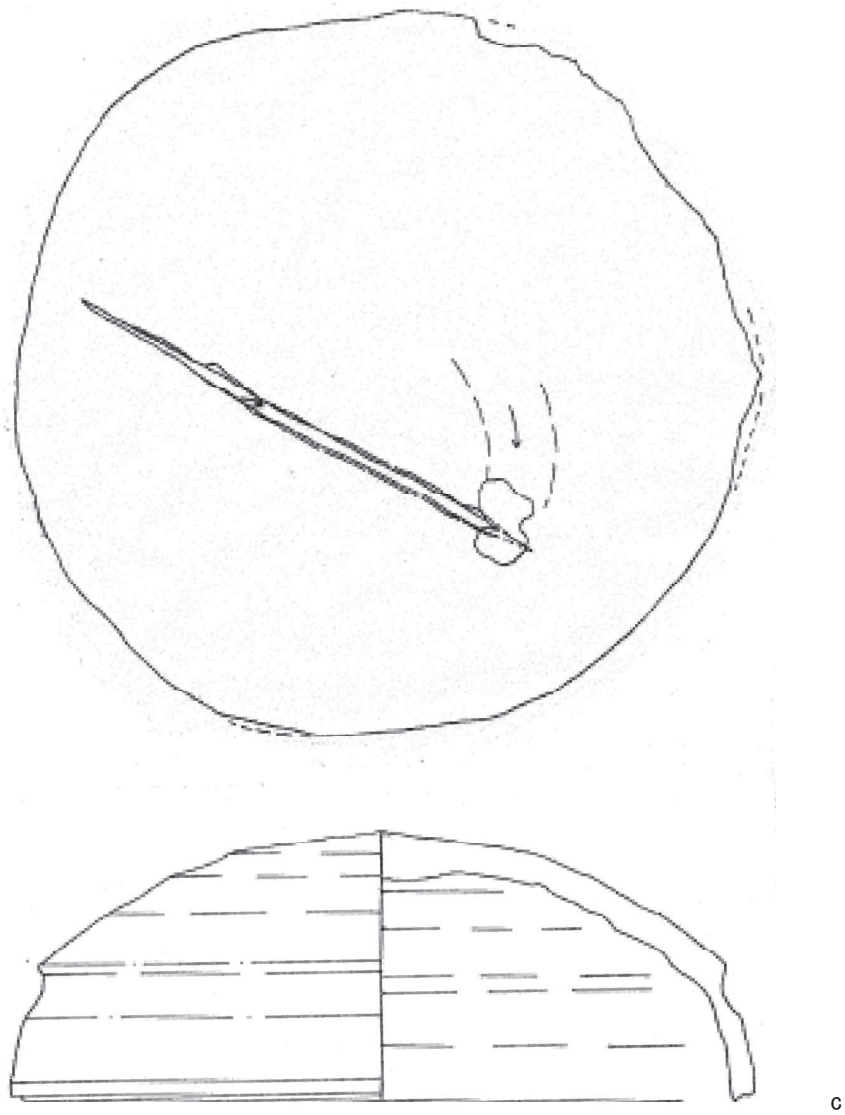


第３図　松ヶ迫遺跡群出土資料③（拓本 17 ～ 22、縮尺２：３）

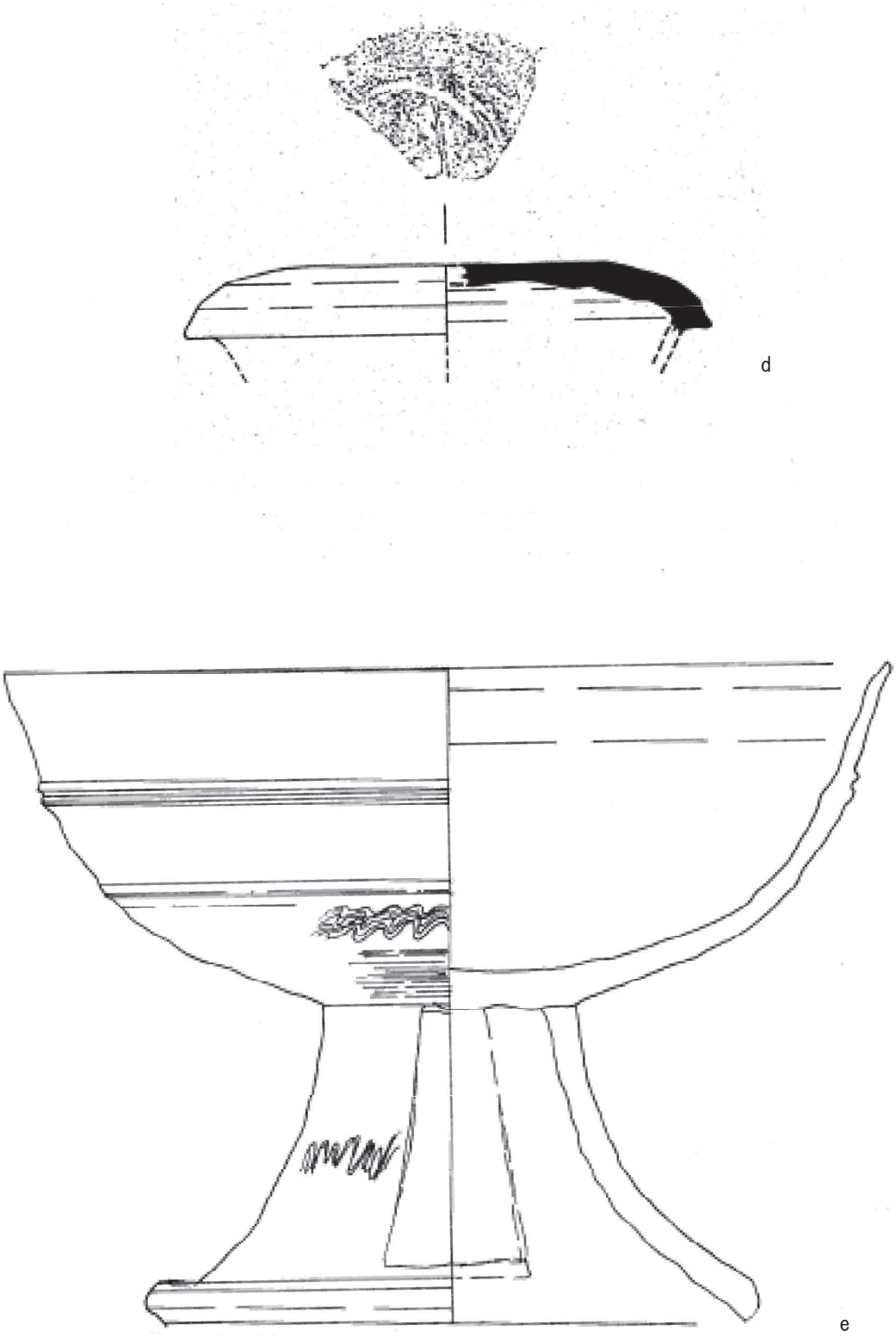




第４図　上四拾貫第７号古墳・和知白鳥遺跡出土資料（a・b、縮尺２：３）



第５図　境ヶ谷遺跡出土資料（c、縮尺２：３）



第６図　大歳遺跡・上四拾貫第６号古墳出土資料（d・e、縮尺２：３）
［d の図面出典　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1994『大歳遺跡』］